

インタビュー

CREST誕生の頃

臼井勲JST前審議役インタビュー

臼井勲さんは、JSTの前進である新技術開発事業団(JRDC)時代の平成7年に、準備室長としてCRESTの立ち上げに関わり、独立法人化後もJST理事、戦略的創造事業本部の審議役として、CRESTの発展を支えてこられました。このインタビューでは、立ち上げのころの苦労話や、今後のマネジメントなどについてお話を伺いました。

CRESTは、平成7年度にスタートを切ったのですが、この制度ができたいきさつをお教えてください。

日本の将来に夢を託した科学技術基本計画

平成3年頃に起きたバブル経済の崩壊の後、公債(赤字国債)を出して公共投資を中心にさまざまな景気浮揚策がとられたのですが、一向に景気が高揚しない。こんなとき、「道路や橋を造っても、日本の将来に希望を与えない。国を立て直すには、科学技術を盛んにして先端技術でよいものを作っていけば将来に夢を与えるではないか」と考えた政治家たちが、議員立法で「科学技術基本法」を作りました。それが、平成7年11月のことです。この法律にもとづいて、科学技術基本計画が作られたのが平成8年3月のことでした。

国は公債を使って事業として科学技術高揚のプロジェクトを実施

それまで、公債を使うのは「将来の子孫のために資産を残す」ということで有形の公共建造物に投資が行われていましたが、「科学技術の成果は無形の知的資産を将来に残す」という論理で、科学技術についても公債を使ってよいということになったのです。大蔵省は、「公債を使ってプロジェクトを行うのですから、実施の主体は特殊法人でしょう」ということで、海外からも高く評価されているERATOの実績があるJRDCにやらせようということになったようです。それで平成7年の8月に、平成8年度予算要求を大蔵省にしました。(注:現在では公債ではなく一般会計からJSTの運営費交付金として配分されています。)

CRESTが始まったのは平成8年度でなく、平成7年度と聞いているのですが、

補正予算で前倒しで制度の発足が認められたのは異例

科学技術の研究環境を整えるのは緊急性があるということで、国は平成7年度の第2次補正予算で10月から前倒しで、次年度予算として要求していた創造的基礎研究推進事業(CREST)という制度の発足を認めたのです。制度を認めるということは、後年度負担も認めるということで、異例の措置であったといえるでしょう。

急決まりだと準備は大変だったでしょうね。

総括の名前が白紙のまま公募が始まった

平成7年度中に予算を執行しなければならないということで、急遽準備室を作って、私が室長になりました。このとき初めて、国が戦略目標を示して、それに沿って事業を進めるというやり方が始まったのです。当時の科学技術庁は平成7年12月に目標を設定しました。この目標に沿って領域が設定され、総括を選び、課題を公募して選考という手順ですが、公募の段階では、領域名だけがあって、総括の先生が決まっていなかったのです。総括欄は白紙のまま12月に公募が行われたのです。7人の先生方に総括をお願いしたのは1月でした。このため、総括をお願いにいった何人かの先生は、すでに自分が応募する書類を書いておられたので、応募を取りやめていただくなど大変でした。公平性を期するために、領域アドバイザーをお願いする先生にも応募をあきらめていただきました。

CRESTでは、どのような方針を立てて運営に当たられたのですか

やるからには思い切ってお金を投入

そのころ、科学研究費などの補助金は数百万円が普通で、そのために研究者は研究計画を細切れにして複数の課題に応募して、トータルで研究室を運営するというようなことが行われていました。これでは、目標にそった目的基礎研究は推進できないということで、大きなお金を投入しました。また、チーム内、領域内で、適切な分担関係で共同研究ができるように、ということで1チーム年間1億から1億5千万が配分されたのです。(注:現在は1課題年間1億円または5千万円となっています)

既存のポテンシャルの活用

ERATOでは、領域代表が自信の研究室と切り離して別な場所に研究室をもつというスタイルだったのですが、CRESTでは、研究代表者それぞれがその所属機関においてもっている研究ポテンシャルを活用するという方針のもと、大学の先生は大学で研究を実施するというやりかたをとったのです。

CRESTの特徴は、目利きの総括がいて、トップダウンで研究を進めることにあると思うのですが、総括はどのようにして選んでこられたのですか。

日頃からの人脈ネットワークが総括選定の決め手

私どもには、ERATOや平成3年に始まった「さきがけ」の経験があって、その選考過程などを通じて、分厚い人脈ができていました。また、委託開発のネットワークもありましたから、いろんな研究者との接点を持っていたのです。だから、ふだんからやっていく中で「どなたかキラッと光っている人います？」とお伺いして、そういう候補の推薦がいただけたのです。また、偉い先生に電話して、コメントをもらったり、推薦をいただいたりすることもありました。

最近、JSTが直接執行する形から、研究機関に委託して執行してもらおう形になりましたね。研究事務所や技術参事がなくなり、研究の進め方やお金の使い方が窮屈になったという総括の先生方からのご意見があるのですが。

委託は時の趨勢。その中で、使命をどう実現するか、知恵が必要

大学が法人化し、間接経費の配分が期待されるなど、研究者を取り巻く環境が変わったのですから、それに応じてファンディングのやり方を委託方式に変えていくことは、時の趨勢でやむを得ないことでしょう。従って、この状況の下で、いかにこれまで培ってきた機能を保つようなマネジメントを構築して、国から求められている使命に応えるかは、JSTの知恵と努力が必要でしょう。

長時間にわたってお話を聞かせていただきありがとうございました。